MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第20号
南九州城郭談話会報
平成15（2003）年6月30日発行

屋久島中世山城跡の調査
―上屋久町楠川城跡―

計　屋　正　人

1　はじめに

屋久島（鹿児島県熊毛郡屋久町・上屋久町）における中世城郭跡は，海岸部に立地する各主要集落に点在し，一部には平家落人伝説により築城が伝えられるものもあるが，ほとんどが16世紀に種子島氏または禰寝氏によって築かれ，使用されたものと考えられている。

楠川（くすがわ）城跡は，上屋久町楠川字折山とその周辺に所在し，種子島氏による屋久島経営の拠点となった山城と考えられ，小規模ながら比較的残存状況が良い。楠川集落に隣接し，北東側直下に主要地方道上屋久・屋久線（県道77号）が通り，活用の地理的条件にも恵まれ，平成7年町指定史跡となっている。

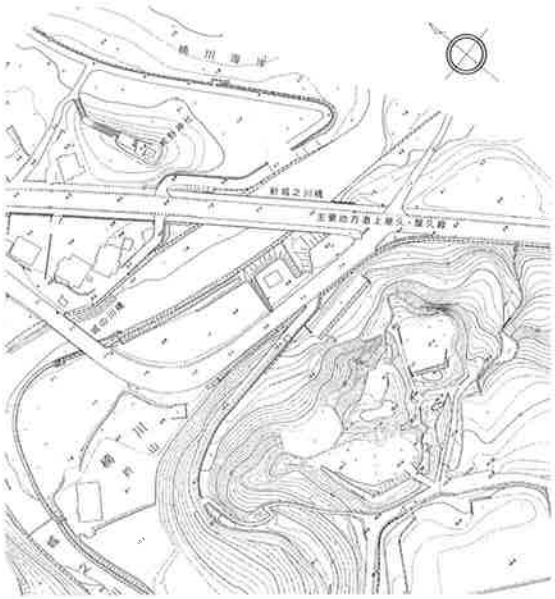


図1　楠川城跡周辺地形図

上屋久町教育委員会では，平成11年度から13年度まで保存整備を目的とした確認調査を実施している。ここでは楠川城跡の現状と調査の概要について触れることとしたい。

2　楠川城の歴史的背景

14世紀の屋久島は，大隅国守護島津氏の領するところであり，応永15年（1408）に種子島で在地領主への道を歩んでいた種子島氏に与えられた。このころ郡司系領主で大隅国禰寝院を領有していた禰寝氏は，種子島氏と敵対関係にあり，また文安年間から姻戚関係でもあったが，島津氏と肝付氏の間が険悪になると，島津氏系の種子島氏と肝付氏系の禰寝氏の関係も悪化する。

種子島氏には同氏の正史ともいうべき『種子島家譜』があり，楠川城の築城，禰寝氏の種子島来襲，屋久島の奪還，その後の抗争などが記されている。『種子島家譜』によれば，「大永4年（1524）2月種子島12代忠時が屋久島に渡り，楠川と吉田に山城の築城を始め，9月に完成した。」とある。また「天文12年（1543）3月種子島13代恵時は，弟時述と通じた禰寝重長に種子島を襲われると，屋久島に難を逃れた。戦いに敗れた恵時は屋久島を禰寝氏に明け渡し，4月に種子島に戻った。」「天文13年1月4日早朝，種子島方の肥後下総守時典は島間から楠川に入った後　C直ちに宮之浦に進み，禰寝方と交戦しこれを破る。」と

ある。これらの記述から，楠川城は大永４年屋久島で最初の中世山城として築かれ，そして天文12年恵時が屋久島に逃れたのも，また天文13年肥後時典が屋久島奪還に入ったのも楠川城であった可能性が伺え，楠川城跡は文献による記述を有する歴史的資料ともいえる。

その後，両氏の争いは，天正元年(1573)禰寝氏が戦国大名島津氏に下るまで続くが，この間「楠川」の地名が『種子島家譜』に現れることはない。

3　楠川城跡の地形的概要

楠川城跡は，屋久島の北東部楠川集落の南東に立地し，北側は種子屋久海峡に面し，南側はなだらかな傾斜の丘陵地へ続く。東側の小川と西側の城之川に挟まれ，全体の縄張りの範囲は南北約350ｍ，東西約350ｍと推定される。

主要部は空堀で仕切られた三つの曲輪（西からⅠ曲輪・Ⅱ曲輪・Ⅲ曲輪と番号を付けている。）で構成され，いずれの曲輪も南側をしっかりした土塁で固めている。主要部は戦中の民家建設の基礎跡や，昭和53年から三度おこった崖崩落及び治山事業による重機車輌進入跡，農道整備などに起因する破壊が行われてきたが，大半は雑木林となり残存している。

Ⅰ曲輪は東側から南側・西側を長さ約60ｍの土塁で囲まれ，北東は空堀でⅡ曲輪と仕切られている。東端が虎口にあたり虎口部及び南西部の土塁は石積みにより固められている。北西部は崩落により原型を留めていないが，平坦面及び土塁が続いていたと推測される。

Ⅱ曲輪は北西部が崩落し，現在土塁と平面残部の二段になっている。東側から南側をスロープ状の土塁が立ち上がり，特に南側は高く広い土塁が築かれている。Ⅰ曲輪と仕切る空堀から高さ約４ｍ，城跡大手口付近の空堀から高さ約５ｍになる。北側から西側は崩落により失っているが，Ⅲ曲輪と同様の作りを有していたものと推測している。

図２　楠川城跡要図

Ⅲ曲輪は南側の一辺に土塁を有するほぼ四角形の曲輪であり，北側から東側は切岸となっている。西側はⅡ曲輪との間に浅い空堀とⅡ曲輪東側の土塁で囲まれる。虎口は南西端と推測される。

4　調査の概要

重要遺跡確認調査として，上屋久町教育委員会は平成11年11月，平成12年10～11月及び平成13年10月に調査を実施した。平成11年度はⅠ曲輪，12年度はⅢ曲輪，13年度はⅡ曲輪及び大手口を中心に調査を行った。また必要に応じて伐採作業を行いながら，地形測量及び大手土塁からⅠ曲輪虎口付近の石積み状況等の実測を行った。

調査前の楠川城跡の特徴を述べると，多くの礫が曲輪内や土塁内に組まれ，あるいは積まれた状態で露出していることが上げられる。特にⅠ曲輪虎口部の石積みは，鈎状に築かれた土塁面に野面積みで築きあげ，Ⅰ曲輪虎口部から城跡大手口部に続く。各曲輪とも調査前の地表を観察すると，こぶし大から人頭大の礫が４分の１ほど露出し，方形や円形に配石され，また列状や飛び石状に，あるいは畑等で捨石を積み上げたような石の集積が見られた。

Ⅰ曲輪内から炉と思われる方形の石組み遺構３基，円形の石組み遺構１基，焼土１基，石集積（ここでは適当な用語が不明なため，石を集め積んだものの意味を表す。）が検出さ

Ⅰ曲輪虎口部の石積み状況

Ⅱ曲輪虎口部から大手口部土塁石積み状況

れた。石集積には規則的な配列は見られないが，明らかに人為的に配置したものと思われ，空堀及び土塁に沿って配置されていると推測される。現段階では投石用と考える。またピットも数基確認できたが建物遺構は確認できなかった。

Ⅲ曲輪からはピット群・石集積・空堀が検出した。空堀は幅約２ｍ・深さ約1.8ｍでⅢ曲輪とⅡ曲輪を断ち切るように北に延びる。この空堀の存在によりⅢ曲輪の虎口が作られ，南側大手からⅢ曲輪への直線的な進入とⅡ曲輪からの進入が妨げられる。またこの空堀の北側は石積みを利用し片薬研堀状に仕上げている。

今調査において得られた遺物は極めて少ない。弥生土器片１点，弥生期の磨製石鏃１点，龍泉窯系青磁碗片１点，加治木銭４点，近世陶器片３点が得られたのみである。このうち中

Ⅲ曲輪空堀石積み状況

世期に比定できる遺物は，青磁片と加治木銭であるが，これらから楠川城跡の使用年代を特定するのは困難といえる。

5　おわりに

今調査では，建物遺構は確認されていない。遺物もほとんど出土しないが，各曲輪とも２間×３間程度の建物であれば十分建つ広さを有する。豊富な遺構に比べ，生活跡が見られないのであれば，完全に無いことを確認する必要がある。今後，主要部の南側に続く丘陵地（現畑地）の発掘調査も考慮し，用途目的等の性格を探る必要がある。

本町では，初めての中世山城跡の発掘調査で，毎回とまどいの連続であった。特に次から次に現れる礫の取扱いに苦慮するが，担当者自身中世南九州の歴史的背景，山城に対する知識や各市町村の報告書など，初めて興味深く触れることができた。現場では起伏に富んだ地形や石の配列など全てが美しく思え，また少年時に経験した基地遊びをふと思い出すこともあった。

稚拙な概要報告となったが，ご意見・ご教示等いただければ幸いである。

（はかりや　まさと）

知覧城の一郭，伊豆殿屋敷について

上　田　　耕

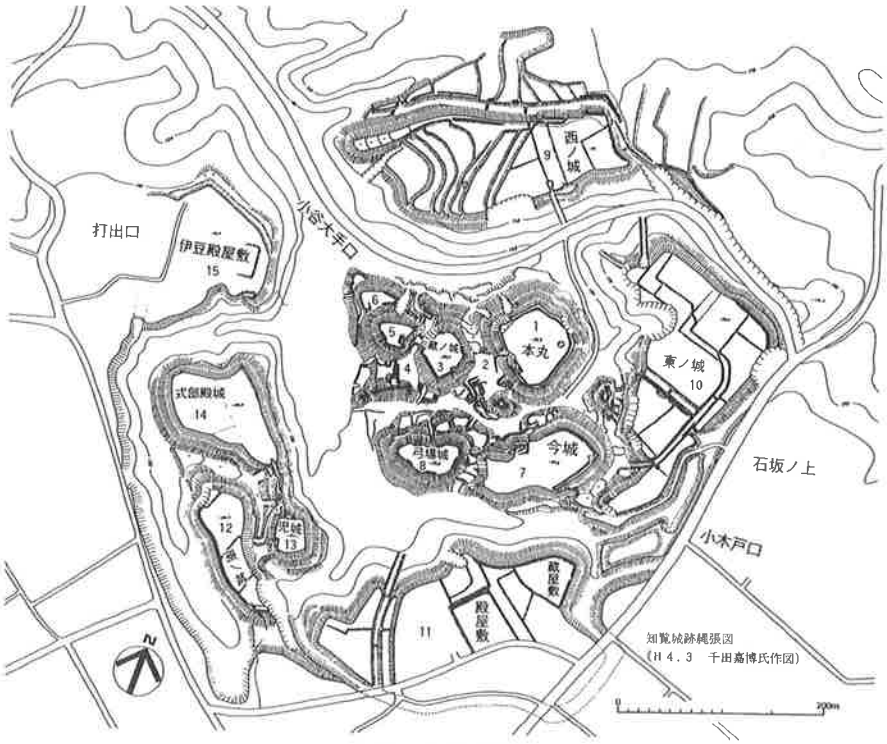
(1)　はじめに

知覧城跡の西側に「伊豆殿屋敷」と言われる一郭がある。今日小分け地名などは残されていないが，寛政４年(1792)の『名所旧跡御糺方取調帳留』（ミュージアム知覧所蔵）や天保年間に作成された「知覧郷惣絵図」（東大史料編纂所所蔵）でも「イツトノヤシキ」として絵図中に登場するのが，それである。しかし，伊豆殿がどのような人物で，いつごろ活躍していたのか。実在した人物なのかどうかも不明であった。ところが，豊玉姫神社に奉納されていた掛面の裏に「伊豆」の文字が墨銘されていることがわかった。墨銘は「慶長５年(1600)庚子６月　伊豆介□歳六十二□・・願主平宗林」である。この掛面が知覧城の外郭，伊豆殿屋敷を居城とする伊豆殿とその一族，関係者によって豊玉姫神社に掛面を奉納した可能性を考えてみたい。

(2)　伊豆殿屋敷と奉納掛面

知覧城の縄張りは，本丸や蔵之城を核とした中心曲輪群と東之栫，西之栫，式部殿城などそれを取り巻く外郭部分の大きく２つに分けられ，さらにそれを蔵屋敷や殿屋敷，下屋敷，伊豆殿屋敷などの屋敷群が取り囲んでいる（千田 1993）。中でも城郭群の西側に位置し，シラス台地の突端を占めている伊豆殿屋敷は字打出口に所在し，今日，打出口集落の端に位置する。現状は畑と山林であるが，大空堀から中心曲輪まで一望できる場所にある。

伊豆殿屋敷の隣，大空堀を隔てた東側「式部殿城」（せきっどんじょ）と称する一郭がある。佐多氏12代忠充の地頭代となった佐多久信の父久治「９代忠将の二男」は系譜（県史料旧記雑録拾遺諸氏系譜二，666項）によると「式部少輔」を称しており，慶長２年(1597)死去後，「故あり，家督久慶小祠を中



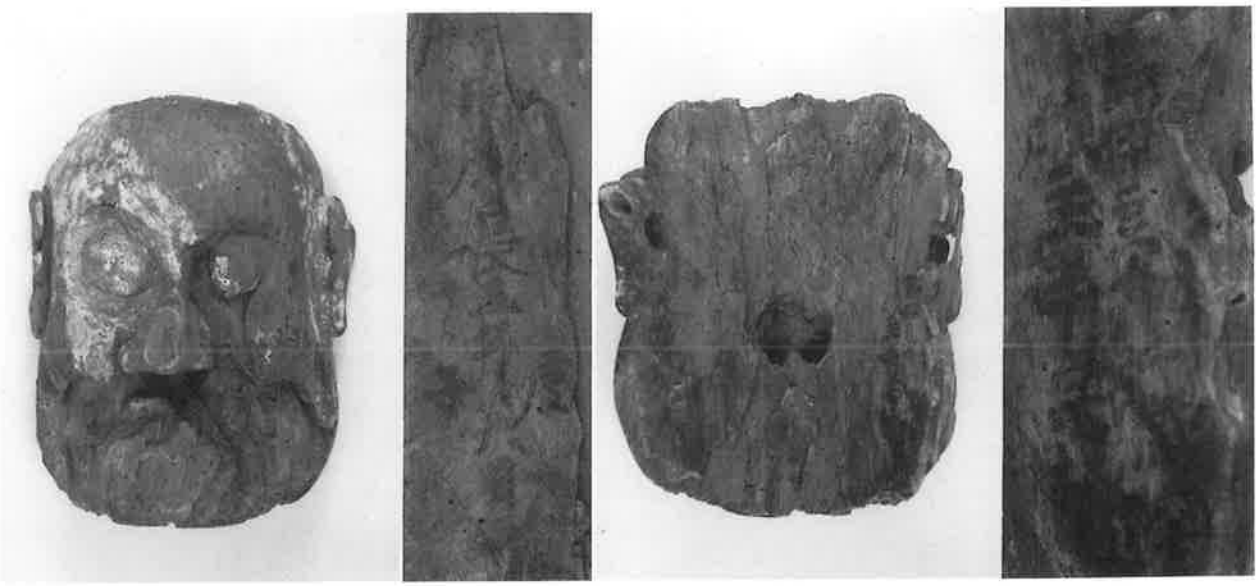
1　知覧城縄張図

宮大明神（豊玉姫神社）の側に建て，久治の霊を神と崇め」たとあり，その祠を「式部殿宮」と呼ばれたという。このことから式部殿城とは，佐多氏二男家に与えられた一郭であったことが，江平望氏の研究によって明らかになっている（江平 1993）。氏によると願主が平宗林で平姓を名のっているところをみると寺師家ゆかりの人物であると指摘する。寺師家は平山氏，樋渡氏等と並び，近世には役人を務める家柄で，代々佐多氏の有力家臣の一人であったという[1)]。もともと寺師家は「寺師殿城と相唱申候佐多家家臣寺師某為罷居所ニ而御座候由申伝候」（『古跡神社仏閣旧記調帳』）と古記録にもあるように，城を構えていた。現在，知覧城跡の北東約１キロのところに単郭の城が存在しているのが，それである。このようなことを考え合わせると，後に伊豆殿＝寺師氏も城郭集住に伴い，佐多氏の有力家臣に組み込まれ，知覧城の西側防衛の要として一曲輪を与えられたことが想定される。現在採集される16世紀代の中国製染付碗・皿等陶磁器片の発見も，そうした事実を裏付けているとみている。さらなる今後の新資料の発見に期待するところである。

豊玉姫神社奉納掛面は，表裏面共に傷みが激しいが，表面には胡粉が残る。縦24.8×横20.3×厚さ9.7センチ，豊玉姫神社所蔵（ミュージアム知覧保管）宮司赤崎千春氏の協力による。

註1）江平　望氏のご教示による。

[参考・引用文献]
千田嘉博　1991　「知覧城の構成」『知覧城跡』知覧町教育委員会
江平　望　1994　「知覧の歴史」『知覧城跡（二）』知覧町教育委員会
ミュージアム知覧　1996『ミュージアム知覧収蔵品図版Ⅱ－民俗編－』
寺師会　1997『寺師一族の800年―その源流を探る』



表面　左側墨銘「慶長五年庚六月・」　裏面　右側墨銘「・伊豆介・・願主平宗林・」

豊玉姫神社奉納掛面

城郭研究

近世の宇土城跡

鶴嶋俊彦

1　小西行長の入国と城郭配置

天正15年，九州を平定した豊臣秀吉は国割を実施した。球磨郡を除いた肥後一国は佐々成政に宛行われたが，検地を強行したことにより国人の一揆が起こり，その討伐によって大半の国人が滅亡した。佐々に替わり領主となったのは，加藤清正・小西行長で，清正は肥後北部８郡と飛地である葦北佐敷の19万５千石，行長は宇土郡・益城郡・八代郡・天草郡の４郡14万６千石を所領とした。小西領のうち天草は，戦国期領主である天草五人衆の支配が認められ小西の与力として存続したが，天正17年春，宇土城普請を拒否したことから小西・加藤・有馬・大村連合軍によって攻略され，領地没収となり，小西の直轄領となった。

行長が本拠に定めた宇土は，戦国期名和氏の本城であったが，すでに名和氏は筑前に移り，小早川氏の与力となっていた。行長は名和氏の本城跡の東側台地に新城を普請し，その北・北東に城下町を築いている。

宇土は緑川の河口に近い水運に恵まれた地で，熊本平野の南端に位置した。熊本平野は戦国期以来「国中」と呼ばれた最も生産力の豊な肥後の中心地であり，清正・行長はこれを分け合う形で領国を形成した。行長・清正はその国中の平野を挟んで本城である「宇土城」「隈本城」を普請し対峙する形となった。

関ヶ原の戦いで滅亡した行長の領国統治の実態は残された史料が少なく後世の編纂物によるところが多いが，支城として益城郡に隈庄城・矢部城・木山城・赤井城，八代郡麦嶋に八代城を築き城代を置いた。直轄領となった後の天草郡にも志岐城などのように支城として存続したものがあるが，明確でない。

これらの諸城は加藤領となってからの改修や廃城があった。小西時代の本・支城については不明確なところが多いが，小論では本城であった宇土城について小西時代の縄張りとともに加藤氏による改修について検討する。

2　本城宇土城の城史

天正16年に宇土城主となった小西行長は，文禄・慶長の朝鮮出兵，その後の慶長３年以後も豊臣家家臣としての行動が多く，大坂居住が中心であった。行長は慶長５年の関が原の戦後に京都で刑死したが，この戦いの最中，肥後に在国していた清正は小西領に侵入し宇土城を包囲，約一月間の籠城戦によって宇土城を開城させた。小西領国は加藤清正の所領となり，留守居であった弟小西隼人（長元・行景・主殿亮（とのものすけ））は隈本城下で切腹したが，家臣の多くは清正の被官となり，宇土城には城代として清正家臣が配置された。隈本新城の「宇土櫓」は宇土城の天守を移築したと伝わり，宇土城内からは慶長十三年銘の滴水瓦が出土するなど，清正の代に宇土城の改修が進められている。慶長16年に清正が死去すると家督は忠広に譲られらたが，翌年幕府の干渉によって，宇土城は破却された。その後，寛永９年に将軍家光の粛清によって忠広は改易となり細川忠利が肥後に入国し，正保３年（1646），細川宇土支藩が成立し，城下に陣屋が設置されている。

3　宇土城の縄張り

小西の本城として築城された宇土城は，宇土市古城町の「城山」にある。名和氏時代の宇土城がある西岡台とは地形的に断絶した沖積平野に突き出た標高17ｍほどの低台地に占地する。行長時代の城絵図はないが，参考史

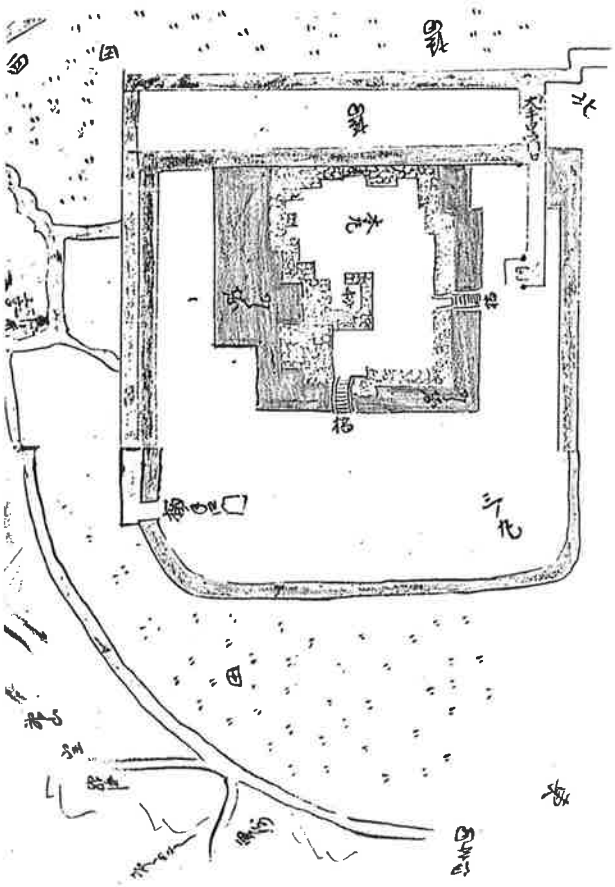
料として『肥後宇土軍記』[1]とこれに添付された宇土城図[2]がある。

宇土攻城戦では，まず城下町はずれの出城である石ノ瀬城周辺が戦場となり，次いで，小西軍が籠城した宇土城をめぐる攻防となった。これらの史料によると虎口数は５箇所で，大手黒門口・搦手口・郭内「門」・本丸南・本丸東に虎口があり，加藤軍は大手の塩田黒門口と搦手の馬場口から攻め立て，本丸近くまで通じていた塩入りの瓢箪淵に兵船を乗り入れている。

宇土城図では，本丸を囲む内堀は空堀で，本丸外周は折れを多くもった石垣に描かれ，本丸西辺に「天守」を置いている。これまでの発掘調査で確認された本丸石垣は，安山岩の均等な大きさの割石を布目積みにした「打込ハギ」で断面は曲線（反り）をもち，加藤氏時代の石垣とされている。一方，内堀外縁の調査では石垣は検出されておらず，素掘りのままである。本丸上部の調査では上層に加藤氏時代の櫓門跡・排水溝・井戸跡などが検出され，２mの盛土の下に小西氏時代の礎石建物・石列・石塁・門礎などが確認されている。天守跡は未確認である。

絵図では本丸の南辺・東辺の二箇所に外郭と連絡する橋（虎口）があり，東の橋は石垣下に接続し，南の橋は石垣上に接続しているように描かれている。発掘調査で確認された上層期の門跡，下層期の石塁は，このうちの東の橋に続く虎口を形成した遺構と推定できる。石垣の残存状況は，出隅・入隅部分が特に大きく崩壊して失われており，破却の様子を示している。

外郭周囲の外堀は絵図では濠として描かれているが，石垣の記載はない。とくに搦手となる西側の斜面は高さ６mほどの切岸となっており，『肥後宇土軍記』の「切ツ立の城」を彷彿とさせるものがある。本丸はこの外堀に囲まれた区画の北辺に偏った位置にあり，外郭の曲輪が本丸の三方を取り巻く構造である。



第１図　『肥後宇土軍記』添付「宇土城図」

大手は外郭北東隅の黒門口で，城内に入って外堀に沿って150ｍほど行くと外郭内に設けられた「門」があり，再度虎口を形成していた。外郭内は県立高校の敷地となり宅地化が進んだ箇所もあるが，概ね古い地割が残されており，屋敷割りの様子を推定することが可能である。「三宮社記録」（『宇土細川氏藩政関係歴史資料調査報告』３）や『肥後国誌』には，この外郭に居住した重臣屋敷の配置が大手からの城内道に沿う形で搦手口まで記述されており，小論では私案として「三宮社記録」に基づいて縄張り図に記載した。

二ノ丸と推定した箇所は，本丸の南の内堀に接した周囲より２mほど高い地形で，絵図に見える本丸南の橋が直接連絡していたと推定される場所である。発掘調査が行われ外周に石垣が囲郭することが判明しており，家臣

第２図　近世宇土城縄張図

屋敷とは異なる公的な場所・機能が推定される部分である。ただし，石垣そのものは加藤氏の代のものかもしれない。

小西時代の宇土の城下は北側の塩田と西側の西岡台下の馬場に家臣屋敷を，北東に町家を置いていた。『肥後宇土軍記』では攻防戦の様子を記述する中で，大手黒門外に「塩田口前出シ」という戦場となった一定の空間があり，割註に「前出とハ大手黒門前ヨリ三宮山山下迄の惣名也」とある。三宮山とは西岡台のことであり，東麓には現在も「舞出」という字が残る。「前出」は宇土城の北側外堀の外周と城下との間に置かれた空間を指していることが明らかだが，縄張り図では明示しなかった。

4　加藤氏による修築

現地に残る宇土城跡は慶長5年から加藤氏の支城となり，12年後の慶長17年には破却されている。『肥後宇土軍記』によると，宇土城落城後，清正は宇土の城番に加藤与左衛門・並河金左衛門を指置き，後には本丸に中川寿林，二の郭に田寺久太夫を指置いたとする。また，改修も行った様子で「宇土の城縄張等清正の心に不相応の所有之由にて，毎歳方々普請有之後は丈夫に罷成候」とある。清正の宇土城改修は，発掘調査によって本丸石垣の全面改修，本丸の嵩上げによる作事の実施が挙げられ，天守の隈本新城への移築が伝えられている。しかし，今日残る城跡の様子から考えると，内堀の外縁も石垣はなく，外堀も石垣のない曲線を描く素掘りの濠であり，清正が大規模に縄張を変更した痕跡は確認できない。ここでは，城跡南側の外堀から水田側に扇形に張り出した地形に注目しておきたい。

この部分は，その地形すべてが字「城下（しろした）」となっており，現在，周辺部が耕地整理されたのに対して旧状の地割を残したままの箇所となっている。その規模は，外堀に接した扇頂部分で270 m，扇端で340 m，幅が100～115 mである。外堀を加えると四周に溝が取り巻いた区画となり，内部には外堀から30 mほどのところに並行して幅10 m弱の溝が掘られている。

この張り出しを宇土城の縄張全体から検討すると，外堀があるものの外郭の地形が高度を減じて水田面と同等となる防御状最も弱点となる箇所にあることから馬出のような虎口機能をもった曲輪であった可能性が高い。宇土城籠城戦においては，大手黒門口と搦手馬場口が主たる攻防の箇所で，この南辺の張り出し周辺での戦闘は記述がなく，絵図にも記載がない。したがって，小西期には外堀が廻るだけで虎口が形成されていなかった，と考えてよい。

『肥後宇土軍記』では，寄せ手の加藤軍は城周囲の沼田が深田と思い込み足を踏み入れておらず，攻城箇所とならず，城受取り後に沼田が浅田で人馬の往来が自由であることを知らされた，という記述がみえる。この記述が外郭南の水田部分を指すものであれば，当然，加藤氏の代に宇土城の補強としてこの箇所に何らかの普請を行ったと考えて差し支えないであろう。また，小西期の大手は加藤領を睨んだ北東にあったが，加藤氏の持城になって以降は，むしろ南方の嶋津氏や相良氏に対処できるような縄張の変更が考慮されたことが予想される。字「城下」に増設された曲輪は，接収した宇土城に大きな改変を加えず，小西氏の宇土城の縄張を活かす形で防御を強化するため，加藤氏が創出した曲輪であった，と評価したい。

註

1）『肥後宇土軍記』は写本が9種以上あり，現在活字本としては井上　正「宇土城に関する近世の記録」（『宇土城跡（西岡台）』史料編　宇土市教育委員会　1977）や『肥後古記集覧』（熊本市史関係資料集　第4集　熊本市　2000）がある。小西行長の重臣である南條玄宅の家臣「福田九郎太夫覚書」などを参考に編纂されている。

2）福島本『肥後宇土軍記』（天保３年に許九斎荒木孝勝が橘園叢書本を書写したもの）にのみ城絵図が添付されている。解題者の井上　正氏は絵図の成立が「後人の追加による極めて新しいもの」とする。絵図は，簡略・素朴な表現だが，地形・遺構に整合的で，福田九郎太夫覚書にも一致するところが多く，同書に見える「宇土古城の図」に相当すると考えられる。宇土城の縄張りを考える上では最も有益な絵図である（小論は参考文献３から引用した）。

宇土城の絵図としては，他に『（主図合結記）宇土城図』（元禄４年成立，国立国会図書館本は正徳３年頃の写本）がある。同図は宇土支藩三万石の城とし，本丸に「本丸東西三十七間，南北十九間」の記載（遺構規模に不一致）がある。本丸の形状・虎口位置は概ね遺構と一致するが，「北虎口」・「東虎口」は土橋，「西虎口」は木橋。折れ多用の北虎口が正面となる（実際とは方位にずれがある）。本丸西側に直線的な塁線の曲輪，外郭周囲は曲線的な塁線で，西端に馬出の曲輪があり，家臣屋敷まで複雑な堀・石垣で防御されているように描かれる。『主図合結記』の絵図は，江戸期の軍学の影響下で成立したものであり，城郭の地形・遺構などに不一致が多く，どの程度実際を表現しているのか疑問であるため，小論では引用しなかった。

参考・引用文献

1　『宇土城跡（西岡台）』本文編・史料編　宇土市教育委員会　1977。
2　『宇土城跡（城山）』宇土市教育委員会　1981・1982・1985。
3　『新宇土市史』資料編第１巻　絵図・地図　宇土市　1999。

◆◆新刊紹介◆◆

書籍・機関誌等

・**『松本城』** 歴史街道スペシャル 名城を歩く 7
　ＰＨＰ研究所　誕生特別定価　540円
・**『国別城郭・陣屋・要害台場事典』** 西ヶ谷恭弘編
　東京堂出版　6,800円
・**『戦国時代の考古学』** 小野正敏・萩原三雄編
　高志書院　14,000円
・**『城郭探検倶楽部』** 加藤埋文・中井均編
　新人物往来社　1,800円
・**『城を歩く その調べ方・楽しみ方』** 中井均編
　新人物往来社　2,200円
・**『戦国の城を歩く』** 千田嘉弘
　筑摩書房　1,200円
・**『中近世城郭』** 北部九州中近世城郭研究会
〔連絡先〕北九州市八幡西区則松6-22-8　中村方

【新入会員】　（６月25日現在）

桑波田景美　　若松　保

第21回見学会・例会案内

日　時	平成15年７月６日（日） ９：30～15：00
集合場所	野田町中央公民館 （鹿児島県出水郡）
交通案内	ＪＲ鹿児島本線野田郷駅 徒歩６分（改善センター）
会　順	(1)見学会　午前 亀井山城・袈城・武家屋敷 (2)例　会　午後

編　集　後　記

◆第20号をお届けします。例会とともに会報も遅れがちになり，半年ぶりの刊行となりました。このところ年２回ペースで，当初の３，４回から減ってしまいましたこと，会員の皆様に深くお詫び申し上げます。第１号が発行されてから６年，今号で記念すべき第20号となり，編集子としては感無量のものがあります。これもひとえに皆様方の御協力のお陰と感謝申し上げます。

◆今号には，計屋正人氏から楠川城の調査報告を頂きました。野面石がやや緩い傾斜で積まれており，それらを用いて虎口などを作出しています。「石積み」には裏込め石もみられ，文献のとおり，16世紀前半の築城とすれば，県内でも古い段階の石垣と思われます。今後の調査研究が期待されます。

鶴嶋俊彦氏からの宇土城についての論考と上田耕氏の知覧城跡の調査記録も掲載することができました。原稿の集まりの悪い中，無理なお願いをしたものです。感謝申し上げます。

◆次号の会報発行は，９月上旬の予定です。原稿は下記まで。　(Shige)

重久淳一〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第20号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
（振替口座 02040－6－7850）
発行者　三　木　　靖
編集者　重　久　淳　一
印刷所　㈱ト ラ イ 社
入会金500円　年会費2,000円